

非認識論証因における推論式 (prayoga) の区別

— PVSV を中心として —

道 元 大 成

ダルマキールティは、非認識論証因を論じる際に、その推論式を形式の違いに応じて多様に展開させて言及している。しかしながら、ダルマキールティの著作間でその推論式の数には時々が変わっており、また *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (PVSV) 等では上位分類、下位分類のような分類構造で表現される。

PVSV 5,6-6,18では、上位分類4種類、下位分類4種類の分類構造でもって説明している。これに関しては、まず、上位分類として、IV svabhāvānupalabdhi と、I svabhāva viruddhopalabdhi, II viruddhakāryopalabdhi を挙げ、この内、IV と I のそれぞれに下位分類として IV-i vyāpakānupalabdhi と I-i vyāpakaviruddhopalabdhi を列挙する形である。しかしながら、III kārāṇānupalabdhi の下位分類として III-i kārāṇaviruddhopalabdhi, III-ii kārāṇaviruddhakāryopalabdhi が挙げられるが、これは I svabhāva viruddhopalabdhi と II viruddhakāryopalabdhi とが IV svabhāvānupalabdhi の下位分類として配当されていない点で、その分類構造が異なっている。

一方で、PVSV 20,7-13では、これらの推論式を IV svabhāvānupalabdhi ・ IV-i vyāpakānupalabdhi ・ III kārāṇānupalabdhi の3種類にまとめ、その下位分類として残りの5種類を述べる。この3種類の分類は、8種類の推論式を同一性 (tādātmya) と因果性 (tadutpatti) という本質的結合関係 (svabhāva pratibandha) を基に再解釈し、3種類を基本形として、残りをその派生形とするものであり、*Hetubindu* でもこの3種類を基本形とし

て述べる点でも一致するものである。 (龍谷大学大学院博士後期課程)